

国際的比較・歴史検証から考える盆景の地域性

1. はじめに

盆景とは、陶磁器製あるいは木製の盆・鉢の上に土を盛り、あるいは水を張って、根の付いた草木や岩、ミニチュアの人物・動物・家などを配置して小さな風景を表現したものである。中国を発祥とし、東・東南アジア各地に伝播して、現在のベトナムでは水盤や池中に岩山を築き草木を植え、水辺にそびえる山や島の景色を表現した「ホンノンボ Hòn Non Bô」が発達した。現在の日本では「盆栽」が主流だが、大正時代以前は「盆景」「盆山」「盆庭」「盆石」「盆画」等、盆器上に景観を構成する技法も発達していた。

本校への入学にあたって私は岐阜県内に初めて住み、可児市内にある鳩吹山や鬼ヶ島、中濃・東濃地域の鬼岩公園、恵那峡、飛水峡など、岩・水・植物が組み合わさった深みのある景観を知った。これらの景観を見たときの感覚をどのように保存し、再現できるか考えた結果、実際の景観を盆景化することを思いついた。持ち運びが可能であること、室内で楽しめること、少ない材料・経費コストで制作できること、そして、実際の景観の特徴を凝縮し強調できることから、通常の庭園にない特徴をもつ盆景を制作することにした。

2. 研究の目的

盆景を実際に制作するためには、技法や表現方法を知る必要がある。現在の日本では盆景の制作は盛んではないため、海外の盆景事情および国内外の盆景の歴史を調査する必要がある。また、各文化の盆景を比較することで、それぞれの盆景がもつ地域性を明らかにすることが可能となると考えた。

盆景の国際的比較・歴史検証によって盆景の技法や表現方法を知り、地域に存在する実際の景観を盆景化することが本研究の目的である。

3. 研究の方法

まず、中国、ベトナム、日本の盆景の歴史を調査し、近現代の盆景がどのように形成されてきたか確認する。その上で、各文化の盆景を形態・用途別に比較し、国際的視点から見た各文化の盆景の地域性を考証する。次に、実在する名所や景観を表現した江戸後期から大正期の日本の盆景を、当時の文献を参考に調査して国内における盆景の地域表現についても考える。これらの調査研究をふまえ、岐阜県東濃・中濃地域の景観を基に、地域の特産品である美濃焼を器に用いた盆景を制作する。

4. 結果および考察

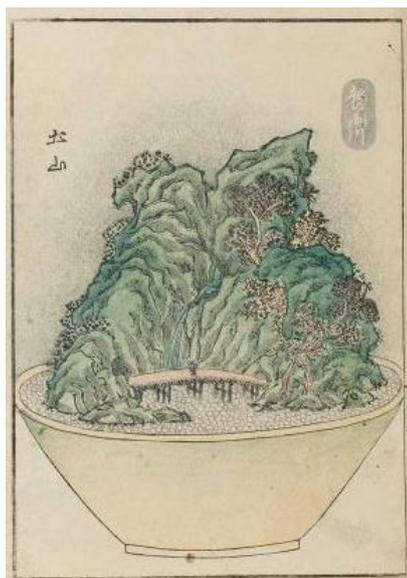
本研究を通じて、中国・ベトナム・日本の盆景の歴史を概観し、それぞれの盆景文化の特色理解の一步を踏み出せた。中国では峰の際立った山や古色の強い樹木の表現が好まれ、詩画の情趣が盆景の制作・鑑賞双方で重んじられること、ベトナムでは水盤や池を使用して水辺の景色が巧みに表現され、ミニチュアの多用や近代的な素材・技法を選択できる柔軟性があること、日本では垂直方向より水平方向・奥行きを意識した穏やかな景観を作ることが特徴であると考察できた。盆景の用途については、中国では仙山思想や文人思想などに関連して「死・俗世から逃れるためのもの」、ベトナムでは皇帝の誕生日の記念に制作されてきたこと、占いに用いられたことから「現世の幸を祝う・願うためのもの」、日本では中国からの舶来品として珍重されてきたことや江戸時代の庶民文化・文人趣味との関連から「財物」および「玩具」の性格が強いと結論付けた。日本の盆景は中国やベトナムと

比較すると宗教的思想的要素が少ないといえる。しかし、言い換えれば宗教的思想的束縛がないために、現代の人々でも制作・鑑賞が容易であり、主題や表現技法を試行錯誤できる状態にあるのではないだろうか。

日本国内の盆景史をさらに調査すると、江戸後期～大正期の日本では名所を再現した盆景が流行しており（図一1）、盆景の制作技法や表現方法の追求も盛んであったことが文献資料から理解できた。特に明治・大正期には新素材の利用や風景論および西洋・東洋美術論の応用によって盆景を近代化に対応させる試みが行われていた。戦中戦後に廃れてしまったこれらの技術や表現方法は、再考証する価値があると思われる。

国際的比較・歴史検証を踏まえ、可児市内の鳩吹山と可児川下流の景観を表現した盆景および御嵩町・瑞浪市の鬼岩公園の景観を表現した盆景（写真一1）を制作し、中国発祥の八景式風景観に基づいて、それぞれに「鳩吹鎮水」「鬼岩清洞」という作品名を付けた。盆景の制作後、実際の景観（盆景化した景観に限らない）を見たときに、景観の輪郭（山の稜線、谷間、道や川の線）を手でなぞる感覚が頻繁に現れるようになり、その景観に対する愛着・親しみが強くなったことはもちろん、その景観をどのように盆景や造園空間に落とし込むか考える頻度が多くなった。一方、制作した盆景を見たときには、実際の景観を訪れたときのことが詳細に思い出され、盆景に一種の記録装置としての役割があることが分かった。

今後は、江戸後期から大正期の名所盆景の再現に挑戦するとともに、海外の盆景に関する更なる研究を進め、新たな「風景」を発見していきたい。また、本校を卒業後、私は出身地の北海道で就職する予定である。アイヌ民族の工芸品や植物利用方法などを参考にし、北海道の地形・地質・植生等に合った新たな盆景を制作するのが現在の私の目標である。さらに、今回は主に視覚と触覚に訴える盆景を制作することができたが、嗅覚や味覚に訴えるもの、触覚だけでも楽しめるものなどを制作し、より多様な人が親しめる盆景文化形成の一翼を担いたい。



図一1『東海道五十三駅鉢山図絵』より
「岡崎 矢作橋」(1848年)



写真一1『鬼岩清洞』
器の直径約 25 cm